

基礎研究が、好きです。

植物が見せる不思議で、面白く、時に頼もしい能力の仕組みを解き明かすのが楽しい。自分の発見が、植物と人間が共に支え合えるような未来の実現に役に立ったら嬉しい。それがたとえ何十年後であろうとも。そう思っていました。しかし、昨今の社会情勢や異常気象、そして自然災害を見るに、どうもそんな悠長なことを言うてはいられないらしい。私たちはもう少し、あるいは、もっとずっと急がなければいけないようです。

とはいえ、基礎研究から応用研究に転向すれば良いという話ではありません。応用研究を発展させるための情報のリソースとして基礎研究が非常に重要であることは理解しています。その上で何が必要かを考えた時に私に思い当たるのは、「世間一般の方々からの理解」です。ここでの「世間一般の方々」というのは、研究活動に携わったことのない人々、または研究活動に関わる機会のない人々のこととします。

私の辛い経験話になりますが、大学院で植物の研究をしている旨を話すと、知人たちから「そんなことをして何になる」とか、「普通に働いて稼げ」なんてことを言われたことがあります。当時は酷く落ち込んだものですが、ふと、そんな知人たちも宇宙開発の話に関しては子どものように目をきらきらとさせることに気がきました。それも、お金儲けに直結するフロンティアへの挑戦としての宇宙開発ではなく、人類はどこから来たのかというロマンの話に、です。意地悪なことを言われた身からすれば「自分の起源を知って何になるの」とツッコミを入れたくもなりましたが、世間一般の方々にとっての研究の価値は経済活動に貢献できるかどうかだけで判断されるわけではないのだと気付くきっかけになりました（誤解のないように添えますが、私も人類の起源は非常に興味があります）。世間一般の方々の興味を引くことができ、できれば理解も示してもらえるようになれば、その分野はとてもし伸びると思うのです。それこそ、宇宙開発のクラウドファンディングのように。

植物科学は、特に基礎研究はどうだろう。人々にロマンを与えることができるだろうか。「その研究は何の役に立つの？」と聞かれた際に、少しでも面倒に感じたことはなかったか。知人たちへの私の対応が悪かったのではないか。未熟な私は反省する点が多々あります。実験をして、論文を書いて、広大な論文の海から応用研究に釣り上げられるのを待つだけで良いのだろうかと思うこともあります。

いよいよ植物科学に限ったことではありませんが、これからの基礎研究は私たち一人ひとりが積極的に発信する科学へと変わっていくべきなのかもしれません。積極的にプレスリリースを出すのも良いでしょう。科学コミュニケーションも最近のトレンドです。友人、知人に自分の仕事について話す際に、研究内容を少しでも身近に感じてもらうように丁寧に話すだけでも違うでしょう。冒頭で「急がなければならない」と述べましたが、急がば回れという言葉があるように、根気強くコツコツと続けることが一番の近道になると思います。地道に30年も続ければ何かが変わると信じています。

「30年後の植物科学」に対する私の答えは「基礎研究が返り咲いている」です。楽観的な憶測にすぎないかもしれませんが、これからの植物科学を担う私たちが果たすべき課題のひとつであることに変わりはないと考えます。